

美の要は羽プレート

構造家・萩生田秀之

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■新豊洲に異次元の空間

「まずは、おめでとうございます！」と構造家の萩生田秀之さんに覇志堂が声をかけた。構造家の岡村仁さん、桐野康則さんとともに、KAPで代表取締役を務める。「新豊洲Brilliaランニングスタジアム」が2019年日本建築学会賞（作品）を受賞したのだ。選考理由では、「近年稀に見る必然の美しさを十二分に感じさせるもの」、「建物はハードウェアと辻褃が合わない部分は皆無であった」と絶賛されている。受賞者講演会を聴衆していた構造家の金箱温春さんが「最近では構造家が連名で受賞することも出てきて嬉しいことである」と言った。

武松幸治さん（企画・設計／E. P. A.環境変換装置建築研究所）と喜多村淳さん（構造設計／太陽工業）のいずれが欠けても成立しなかった新しいスタイルの建築でもある。元陸上競技者の為末大さんが「誰もがスポーツやアートを楽しむことができる施設をつくりたい」と呼びかけて形になった。

本誌2017年5月号に掲載された写真の萩生田さんが一番苦労した接合部のバタフライ金物と湾曲集成材の構成が美しい。連結したアーチに2枚重ねてETFEの透過率が35%の膜屋根が架かっている。設計命題の一つであった「ETFEを美しく魅せる木造架構の建築」は、木架構を補剛する方杖をなくしたのが決め手になって、優しい光の中に空間美を際立たせた。日没後にETFEの光がランドマークになっているのは言うまでもない。もう一つの命題が、「解体、再構築が容易にできるディテールにすること」であった。将来的に移転しなければならないという敷地条件で、最初から木架構に決まっていたのもそのためだったという。

2021年に移設されるときには構造設計が真価を発揮するはずなのです。



■明治大学の気質

萩生田さんは1977年生まれで、2002年に明治大学大学院を修了した。材料学か、環境学かで悩んだけれど、今から4年前に退任した野口弘行名誉教授の研究室で木質構造を学び、接合部の研究もした。明治大学卒業生で初めての日本建築学会作品賞受賞につながった要因だったのかもしれない。因みに、野口教授は合気道7段という大家。先生が言った「取り返しのつく失敗であっても、失敗はしてはいけない」の言葉が深い。萩生田さんの中には野口先生をとおして明治大学の気質が活きている。今母校で兼任講師を務めてその気質を伝えているよう。

腰原幹雄東京大学教授が、率いるNPO法人team Timberizeで理事をしている萩生田さんを推薦して、このスタジアムの構造を担当することになったという。大学院を出てKAPの前身である空間工学研究所にいた。岡村さんのつながりで2012年頃から、構造家の渡辺邦夫さんのところに派遣された時期が続いた。「国立競技場などのコンペなど手伝わせていただいた」が、大構造家の設計に取組む意気込みに圧倒されて得るものが多かったという。一昨年には台湾のプレゼンテーションに同行して「死ぬ気で設計に取組む姿勢」の健在ぶりに再刺激を受けたのだった。

多摩ニュータウンが今とは違う風景だった頃、地元で建設会社をしている家に育ったから木造建築の原型が体に染み付いているのかもしれない。これからは「木造を広い意味の幅で捉えて設計ができればと考えている。エネルギーをしっかり吸収する金物を研究したい」。同時にPCにも力を入れていきたい」と語る萩生田秀之さん。「アトリエ系事務所で構造をするのが大事だと思っている。アトリエ系を失わせてはいけないと思う」。